

妙安寺だより 355

開山 可観院日延上人 (3)

韓国での前後の14代王・宣祖 15代王・光海君 16代王・仁祖の時代

王は、後継者を長男のではなく、二男のを(世つぎ)にと指名した。

光海君は戦時中、臨海君が豊臣軍の捕虜となる一方で、多くの武勲を立てたからである。

この決定はあくまでも戦時中の暫定的な処置だった。そのため、戦いが終結した8年後の1606年に、宣祖王が正室のからをかると後継者選びが再び問題となった。

壬申倭乱の傷あとが深く残されていたが、王宮ではを巡る争いがになっていった。

宣祖王自身、永昌大君をにしたいという気持ちがあり、また、臨海君も王位の座をめていなかった。

しかし、光海君をに指名した手前、簡単に意見をすることができず、1608年、宣祖王はこの世を去り、決定権は正室であるにねられたが、彼女は2歳の息子に政治を行なうことは不可能だと判断して、光海君を即位させた。

王となった光海君(即位 1608～1623)は、壬申倭乱によってした国土の回復、外交面でも国防に力をぎ、異民族たちの侵略を防ぐ役割を果たした。

一方では、即位した翌年1609年に臨海君を配流した上で処分。1614年には8歳の永昌大君まで処刑。さらに、義母のから大妃の身分をして。のまでもをつけて命を奪った。

1623年、の兄・は光海君を捕らえ、王位をけるための大義名分を得るために、われの身のを解放した。彼女はが16代王・として即位することを認めた。

光海君はに島流しになったが、復権をすることを夢見て濟州島で66歳まで生き続けた。

朝鮮王朝の罪人が送られる土地の中で、濟州島は最も重い者が送られる土地である。

この一連の事件を「」(15代王・光海君を追放したクーデターのこと)と呼んでいる。

参考文献〔朝鮮王朝物語〕

